

パーマネントの戦中史とその後¹

富澤 洋子 / ポーラ文化研究所

1. はじめに

美容の領域で、第二次世界大戦中の大きなトピックの一つにパーマがある。「パーマネントをやめましょう」の標語を報道写真などで目にしたことがある方も多いだろう。パーマネント禁止は当局からの通達と考えられることも多いが、実際には美容業界の自主規制であった。ここで問題視されているパーマネント＝パーマネントウェーブは、現在行われている薬品を使ってウェーブを固定するコールドパーマとは違う技術が用いられていた。もともと 19 世紀末にフランス人のマルセル・グラトーが、髪に人工的にウェーブを付ける方法を考案し「マルセルウェーブ」と呼ばれて 1920 年代に流行、日本でも大正時代末から昭和の初め頃に欧米のよそおいとして取り入れられるようになった。当時はハリウッドをはじめとする海外の映画上映によって、マレーネ・ディートリヒら出演女優の化粧や髪型にも注目が集まっていた。第二次世界大戦前、昭和初期には憧れの海外の最新流行について、それが日本人に実現可能かどうか、また日本人に似合うかどうかは別として、情報を手に入れ実践することができる、そのような時代を迎えていた。

2. 「日本」の髪型

ここで、日本女性の髪型の変遷をおさえておきたい。艶やかに長い黒髪への美意識は平安時代に始まったとされている。それ以前は埴輪や絵画などの遺物から、結い上げる文化だったと考えられる。遣唐使が廃止され日本独自の文化が醸成されていく中で、貴族の女性が垂髪（すいはつ）となっていく。『源氏物語』などの古典文学の中では身の丈に余る黒髪の美しさが表現され、ウェーブのない直毛がよしとされる美意識が、実に千年も続くことになるのである。鎌倉時代の成立とされる《男衾三郎絵巻》は、ウェーブヘアを描いた珍しい例である。しかし、激しく動く必要のない相当高位の女性でない限り、長い垂髪は働く際には邪魔になる。そこで労働階級の女性達には、髪を後頭部の低い位置で束ねたり丸く括ったりするなど、実用優先のあしらいが採用され、長く続いた。単純な髪型に変化の兆しが現れるのが安土桃山時代。そしていわゆる日本髪が華やかに展開したのが江戸時代である。細かい形の差を数えると、江戸時代に結われた女性の髪型は数百にもものぼるといわれ、時期や地域、身分のほかに、未婚の島田髷（しまだまげ）、既婚の丸髷（まるまげ）のようにライフステージによっても結い分けが行われた。

¹ 本稿は、パーマネントの戦中史とその後. 図書. 第 920 号. 2025-8, 岩波書店, p.22-25.を再掲したものである。

3. 西洋化の波

明治の開国によって、服装の欧米化が進む。ドレスを着用したのはごく一部の外交に関係のある上層部の女性たちのみ、完全な洋装化は昭和に入ってからである。ドレスに合う髪型として束髪（そくはつ）が考案され、日本髪と比較して簡単に結えることができ、手入れも簡単で和装にも似合ったことから次第に普及していった。明治時代の終わり頃に庇髪（ひさしがみ）や二〇三高地髷（にひやくさんこうちまげ）など、一時期日本髪同様に付け毛や入れ毛を使った技巧的な髪型も登場したが、次第に地毛だけで結う髪型に落ち着いていった。

長い間直毛をよしとしてきた日本に、これまでにない美意識による髪型が登場した。曲線の美しさ、ウェーブヘアである。はじめは炭などの火力で熱した金属製のヘアアイロンで髪に波形のくせを一時的につけるだけだったものが、次第に電気を使った大がかりな機械が登場し、ウェーブを定着させる薬剤の改良が進み、パーマメント（長持ちする）ウェーブをつけたスタイルは、20世紀前半を象徴する髪型となった。

4. パーマメント到来

パーマメントウェーブが日本に導入されたのは、大正時代末とされる。当初は輸入品の機械を使い、施術を行う美容院も少なかったが、昭和10年代に入ると、手軽さを求める当時の化粧法とも合致し普及が進んだ。しかし戦時下にあつて生活全般に贅沢品を規制する動きがおこり、パーマメントにもその矛先が向けられた。国産のパーマメント機の開発が進んだとはいえ、施術料は決して安いものではなかったし、華やかな印象は時局柄ふさわしくないとされた。

政府の圧力がかかり始めるのは、国民精神総動員委員会が昭和14年（1939）に発表した「公私生活を刷新し戦時体制化するの基本政策」²からとしてよいだろう。美容業界では管轄の警視庁から自粛を求められ、美容家の談話やパーマメント是非論などが新聞紙面に取り上げられている。業界では生活刷新案を受けて自粛事項を申し合わせ、華美ではない実用的なパーマメントの髪型を提案して対応しようとした。生活刷新案に法的な拘束力はなく、「要は自粛の精神で（中略）反非常色を抹殺して自粛したものなら³」許されるという程度のものではあった。実際、婦人雑誌や新聞紙上の髪型の提案でパーマメントが姿を消すことはなく、昭和15年（1940）には再び警視庁からの自粛指導が美容業界に対して行われ、業界団体ではパーマメントお断りのチラシを配る街頭運動なども実施した。ポーラ文化研究所が行ったアンケート調査⁴では、当時の化粧の思い出としてパーマに関するものが多く、炭などを熱源にした代用パーマが行われ続けていたことがわかる。新聞記事などパーマメントを批判する声は、終戦間際の昭和20年（1945）の春をすぎても散見される。

² 生活刷新案。「婦女子の『パーマメントウエーブ』其の他浮華なる化粧服装の廃止」は、礼服の着用規定、男性学生生徒の長髪禁止とともに決定された

³ 1 実行されなかったら…泣いても泣ききれぬと竹原女史。東京朝日新聞、1939-6-25, p.11.

⁴ 大正から昭和初期生まれの女性の初化粧アンケートから [中間報告] . Maquiller. No.1. ポーラ文化研究所, 1990, p.3.

5. 強まる圧力、そして終戦

当初は表向きの規制にとどまっていたパーマメントだが、昭和 18 年（1943）の増税で、美容サービスの領域では、1 円以上の施術に対して 3 割の課税が決まった⁵。さらに婦人団体がパーマメント廃止運動を実施、美容家は当局からの委嘱でパーマメントヘアに代わる髪型の提案を行った⁶。そして同年、パーマメント用電力供給が全面停止、金属製のパーマメント機は金属回収の対象となり、美容院の施術としてパーマメントは存続困難な状態に陥った。次第に戦況も苦しく戦時色が一層濃くなると、社会全体が軍需へと傾いていった。雑誌からは美容記事や化粧品の広告が姿を消し、店を閉める美容院も相次ぐ。美容業界にはパーマメントのみを廃止して美容業を続ける企業整理が行われ、昭和 19 年（1944）、その保証金をもとに東京の主だった美容家が加盟する東京婦人美容組合は軍需物資工場「東美電機工業株式会社」を設立⁷、業界の解体を避け生き残りを図ろうとした。この工場も空襲で罹災、美容院は疎開するもの、焼け出されるもの、もはや営業どころではなくなっていった。そして迎えた昭和 20 年（1945）8 月 15 日の終戦。10 日後の 8 月 24 日付の新聞には早くも「電力制限撤廃」を報じる記事が掲載された。「最も制限され一部は禁止されてきた（中略）パーマメント用等電熱器」もすべて規制解除となる。やがて迎える戦後の美容院全盛時代へ向けての歩き始めの小さな一歩だった。

6. 欧米をお手本に

美容業界は平和産業との位置づけや、人々のよそおいへの渴望感から比較的復興が早かったが、社会全体の物資不足はいかんともしがたく、客のニーズに応えることが難しかったという美容師の証言も多い。戦後すぐに流行した髪型で、マンガやアニメーションでおなじみの「サザエさん」のスタイルに似たものに欧米の女性の髪型をまねた「ロール」「ワンロール」「ロールカラー」といった髪型がある。「サザエさん」の連載が始まった昭和 21 年頃は、コールドパーマ（現代と同じ方法で行うパーマ）ではなく戦前からの電気パーマで、機械などの物資も不足していたと考えられ、手ぐしやあり合わせの器具を使っていた可能性が高い。戦時中に華美なものが制限されていたことへの反動から、外巻きや内巻きにカールした髪に入れ毛でボリュームを出す髪型が好まれたようだ。また、美容器具や器材。化粧品が不足する中、比較的簡単にスタイリングができたことも、流行のひとつと考えられる。サザエさんは 20 歳代前半という設定であり、現代からすると不思議な形に描かれた髪型は、当時の最新流行を取り入れたものだったようだ。コールドパーマは PX⁸となった銀座・松屋呉服店などに入店していた美容院が発信拠点となったとされる。国産のパーマ液の生産もはじまり、昭和 30 年中頃には、コールドパーマが主流となっていったようだ。そして、昭和 40 年代に入るところには、新聞などに自分で行うホームパーマも紹介されている。

⁵ 当時のパーマメント施術料は 5～10 円

⁶ 決戦型結髪 五分で結び上がる。朝日新聞, 1943-10-30, p.4.

⁷ 電髪から銀翼へ 女ばかりの生活設計。朝日新聞, 1944-2-19, p.3.

⁸ Post Exchange の略。アメリカ軍隊内の売店。酒保

7. 絶え間ない変化、そして現代へ

昭和 20 年代後半からは欧米の影響を受けながら次々と新しい髪型が展開される時代に入った。ワンロールなどの大きなカールやウェーブの髪型の後に、昭和 20 年代中ごろから 30 年代前半にかけて、フェザーカット、ヘップバーンカット、セシルカットなどのショートヘアが注目を集めた。日本人の硬い直毛では欧米で流行した髪型のように、頭にぴったりと沿わせることが難しかったことが、当時の新聞の美容記事や美容師の回顧録に残り、誰もが挑戦できる髪型ではなかったようだ。同時期に流行したボブヘアなども合わせ、パーマをかけることによってセット＝整髪しやすくすることを目指した。ウェーブで動きを表現したが、揺れ動く髪が登場するのは昭和 40 年代に入ってからである。ミニスカートファッションと同時に登場したヴィダル・サスーンによるジオメトリックカットを皮切りに、ヒッピースタイルのロングヘア、ボリュームのあるトップと対照的に軽く梳いた襟足のウルフカット、大きな外はねカールが印象的なファラフォセットヘア、サーファーカット、そして一世を風靡した聖子ちゃんカットなど、昭和末にかけて揺れ動く髪が定着していった。これに伴い美容院での施術の仕上げメニューの大きな変化が昭和 40 年代頃を境に、セットからブローへと変化した。そして平成の「ゆるふわ」ヘアを経た現代、髪はもはや型だけでなく色までも自由になって、グレイヘアやカラフルな髪色が当たり前になってきている。最近のヘアカタログは髪型の人気投票サイトを見ると、ジェンダーも飛び越えた個性を表現する手段になっている。化粧や髪型など粧（よそお）いの文化は、変化の明確な要因を指摘することは難しいが、世相を反映して移り変わる。戦争という物理的にも精神的にも制限のある時代におこった「パーマメントはやめましょう」という出来事を記憶にとどめておきたい。

主要参考文献

美容現代史. 日本理美容教育センター, 1970-7.

石川準吉. 国家総動員史. 国家総動員史刊行会, 1975-1987.